様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６７２５

研究課題名（和文）台湾ニューシネマとそれ以降の台湾映画における「日本時代」表象研究

研究課題名（英文）Study of Japanese Colonial Representation in Contemporary Taiwan Films

研究代表者
赤松　美和子（佐藤美和子）（AKAMATSU, Miwako）

大妻女子大学・比較文化学部・准教授

研究者番号：００５１０６５３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代台湾映画における「日本時代（日本統治時代）」の表象について分析した。その結果、『海角七号』が公開された2008年をメルクマールとして、それ以降の現代台湾エンターテイメント映画に描かれる「日本時代」は、日本植民地統治への批判や評価というよりも、中国との緊張関係に直面している21世紀の台湾において、台湾の歴史物語の一部の創造および再記憶化のための素材として機能していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで台湾ニューシネマにほぼ限られていた台湾映画における「日本時代（日本統治時代）」表象研究に対して、本研究は、1960年代、1990年代、2000年代、2010年代の台湾映画における「日本時代」表象の分析を試み、「日本時代」表象の体系的な理解を可能にした。その結果、「日本時代」表象は、日本植民地統治への批判や評価に繋がるものというよりも、常にその時の東アジアにおける台湾の政治的社会的状況を多分に反映した可変的なものとして、台湾歴史物語を創造する素材の一部として機能していた。

研究成果の概要（英文）：In this study, I analyzed the representation of the Japanese colonial period in contemporary Taiwanese cinema. As a result, one trend in modern Taiwan entertainment films has been to express the Japanese colonial period in nostalgia for the past, with 'Cape No.7' released in 2008 as a turning point. It is thought that behind this was the demand to review Taiwan's unique history in response to its economic and political approach to the People's Republic of China. Taiwanese films released after 2008 depicting the 1990s showed a tendency to nostalgic for Japanese popular culture and the conservative view of gender in Japan, indicating that not only the Japanese period but also Japan itself functioned as a nostalgic target in modern Taiwanese films.

研究分野：台湾文学

キーワード：台湾映画　日本時代　日本大衆文化　ジェンダー　台湾文学　日本表象　歴史記憶

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2008 年、日本の植民地統治と引き揚げを日台の悲恋の物語とした魏徳聖監督『海角七号』が台湾で大ヒットし、歴代台湾映画として最高の興行収益を上げた。その後も植民地期最大の抗日暴動である霧社事件を活劇化した魏徳聖監督『セデック・バレ』(2011)、現代の大学生が「日本時代」へタイムトリップする葉天倫監督『大稲埕』(2014)、嘉義農林学校野球部の甲子園での活躍を青春ドラマ化した馬志翔監督『KANO』(2014）など「日本時代（日本統治時代)」は現代映画の創作源となっており、うち、三本は歴代台湾映画興行収入ベスト 10（2017 年までの中華民国剪輯協會の統計を参照）に入っている。

現代台湾エンターテイメント映画において「日本時代」が創作源となっていることについては、日台双方において近年注目され始めていた。また、台湾ニューシネマについてはすでに研究の蓄積がある。だがそれ以外の台湾映画における「日本時代」表象についての研究は多くない。「日本時代」が現代台湾エンターテイメント映画の素材となる傾向についての探求、および「日本時代」表象に関する体系的な研究はなされてこなかったため、要因を探求するとともに、こうした傾向を台湾映画史上に位置付けるべく研究を開始した。

２．研究の目的

なぜ台湾映画は「日本時代」を創作源として選ぶようになったのか、それはどのように描かれ、どのような効果が期待され、どのように受容されたのかについて、現代台湾映画における「日本時代」表象を、文学との関係性や台湾社会における「日本時代」評価の変遷も視野に入れて考察し、植民地記憶の再記憶化を検討することが本研究の目的である。

３．研究の方法

研究方法としては主として以下の三つの方向から本テーマについて整理し、研究成果を公表した。

① 現代台湾映画における「日本時代」表象について分析した。
② 現代台湾映画のみならず、戦後の台湾映画における「日本時代」表象について通史的な理解に寄与するために、これまでほぼ論じられてこなかった台湾ニューシネマ以前、とりわけ 1960 年代の日本表象および「日本時代」表象について整理した。
③ 現代台湾映画における、「日本時代」以外の、とりわけ日本大衆文化が台湾を席捲した 1990 年代の日本表象について整理、分析した。

４．研究成果

本研究の研究成果として、以下の論文を発表した。

（１）現代台湾映画における「日本時代」の語り ―『セデック・バレ』・『大稲埕』・『ＫＡＮＯ』を中心に」
：現代台湾映画『セデック・バレ』(2011)、『大稲埕』(2014)、『ＫＡＮＯ』(2014）を分析対象とし、「日本時代」を語る手法とその意義について考察した。これら現代台湾映画における「日本時代」は、何重にも物語を閉じ語り終える『セデック・バレ』、「日本時代」にタイムトラベルする『大稲埕』、嘉農に敗北し戦地に赴く日本軍人の回顧として語られる『ＫＡＮＯ』というように三者三様の巧みな語りを以て語られている。こうした手法を以て「日本時代」を語ることの意義は、「日本時代」を、中華民国、現代中国、現代日本とはもちろん、現代台湾とも直結することのない、しかし仮想的ノスタルジーに満ちた台湾歴史記憶物語として語ることにあると論じた。

（２）「一九六〇年代の日台合作映画製作の背景および「日本時代」と「抗日戦争」表象」
：1960 年代に公開された日台合作映画『金門島にかける橋』、『カミカゼ野郎 真昼の決斗』、『星のフラメンコ』を分析対象として、制作の背景を明らかにするとともに、「日本時代」と「抗日戦争」表象について分析した。日台合作であるが、日台はそれぞれに求めるものが異なっていた。日本側は、台湾のエキゾチックな風景、軍隊によるダイナミックな映像を求め、台湾側は日本の撮影技術を求めた。日台合作映画とは、手は携えるが決して向き合うことのない同床異夢であった。

（３）「魏徳聖在日本的接受状況」
：魏徳聖監督が「日本時代」を描いた映画『海角七号』、『セデック・バレ』、『KANO』が、現代の日本においてどのように受容されたのかについて、映画の興行的側面と、日本の台湾研究お

よび映画研究の側面との二方面から報告した。台湾映画ファンからは、魏徳聖関係映画の活況を喜ぶ傾向が見られた。また、研究者からは「親日映画」という評価軸から生じる可能性がある日本植民統治の肯定という誤読への危惧や、中国・韓国との比較の下に、台湾を「親日」と単純化して受け取ろうとする日本社会への懸念を様々な角度から検証しようという批判的姿勢がみられた。

（４）「1960 年代の台湾映画における日本表象」
：1970 年代以降の台湾映画における日本表象が時代毎に類似したイメージであるのに対し、1960 年代の台湾映画における日本表象は台湾の歴史的言語的重層性を鑑み、多様である。そこで、日台合作映画、日本映画をリメイクした台湾語映画、台湾語日本時代映画、台湾語日中戦争映画、中国語日中戦争映画の五つのジャンルに分類し考察することを通して、1960 年代の台湾映画に、官製の中国語映画史には書かれていない、日本との複雑な記憶の交錯が表されていることを明らかにした。

（５）「台湾学園映画が回顧する 1990 年代と日本大衆文化」
：1990 年代を舞台とする台湾の学園映画 4 本において、日本大衆文化がどのように表象されているかを整理するとともに、その手法を分析しその意義を考察した。その結果、21 世紀に公開され 1990 年代を描いたこれら 4 作品は、時が経つほどに、日本の大衆文化が多く現れ、単純化され、異性愛的な恋愛ストーリーが多くなっていた。日本の大衆文化は、作品において、男性性、女性性を強調し、異性愛的な欲望を満たす役割を果たしていることが明らかになった。つまり、日本大衆文化は、規範的なジェンダー化や異性愛の強化として機能している。LGBT 先進国の現代台湾における学園映画は､台湾の 90 年代および当時の流行の一部としての日本の大衆文化はもちろん現代日本さえも、異性愛に基づいた保守的なジェンダー規範とともにノスタルジックに懐古していた。

上記の 5 編以外に、関連する複数の文章を発表した。

① 「多元化台湾現地レポート（4）二〇一七年の現代台湾における日本時代―『花開時節』の「今日的戦略」」
：楊双子の作品で、現代台湾の女子大学生が日本時代にタイムトラベルして少女となり、日本人の少女と愛し合う百合小説『花開時節』（2017）を紹介した。

② 「多元化台湾現地レポート（6）台湾の一九四五年八月一五日『終戦那一天』」
：台湾人にとって、「勝戦」とも「敗戦」とも言い切れず、「終戦」としか表しようがない 1945 年 8 月 15 日のあの日を、第一章「志願兵」、第二章「少年工」、第三章「医療者」、第四章「記者」、第五章「師範生」、第六章「音楽家」、第七章「政治夢想者」、第八章「在台日本人」、第九章「海外在住台湾人」の九つの立場から語ったノンフィクション文学『終戦那一天』（2017）を紹介した。

上記の研究を進めるうえで、関係する映像資料や研究書などを購入した。また、国家図書館、国家電影中心、国立台湾図書館、国立台湾大学図書館において資料を閲覧および複写することができた。これらの資料については、継続して研究に利用していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 赤松美和子「台湾学園映画が回顧する 1990 年代と日本大衆文化」『大妻比較文化』査読無、20 巻、3－21 頁、2019 年

② 赤松美和子「1960 年代の台湾映画における日本表象」『大妻比較文化』査読無、18 巻、3－17 頁、2017 年

③ 赤松美和子「魏徳聖在日本的接受状況」『中外文学』査読無、45 巻 3 号、195－204 頁、2016 年

〔学会発表〕（計 3 件）

① 赤松美和子「重現 90 年代青春電影中的日本表象――以《九降風》為中心」第三屆台灣竹塹學國際學術研討會、2017 年 10-11 日、國立清華大學（台湾、新竹）

② 赤松美和子「Japanese Images in Genres: Pretexts of the Japan Complex in Taiwan Cinema」AAS-in-ASIA - Kyoto 2016　2016年6月25日、同志社大学（京都）

③ 赤松美和子「戦後台湾映画における日本時代表象」日本現代中国学会 2015 年度全国学術大会、2015 年 10 月 25 日、同志社大学（京都）

〔図書〕（計 6 件）

① 赤松美和子、清華大學（台湾）、『第三屆竹塹學會議論文集』（分担執筆）（近刊予定）

② 赤松美和子、群學出版（台湾）、『臺灣文學與文藝營—讀者與作家的互動創作空間』2018 年、1-288 頁

③ 赤松美和子、允晨文化（台湾）、『戰後台灣的日本記憶：重返再現戰後的時空』2017 年、365 頁中 191-230 頁

④ 赤松美和子、三元社、『台湾のなかの日本記憶』、2016 年、306 頁中 157－189 頁

⑤ 赤松美和子、明石書店、『東アジアの政治と文化』、2016 年、307 頁中 291－307 頁

⑥ 赤松美和子、若松大祐（共編）、明石書店、『台湾を知るための 60 章』、2016 年、375 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。